

大学生の対人場面における主体性について

—完全主義に着目して—

○菊崎菜菜実・生塩詞子

(安田女子大学大学院文学研究科)

問題と目的

私たちは日々主体性を求められることが多くあるが、主体的に動くことのできない人もいる。主体的に動けなくなる理由について予備調査したところ、「失敗が怖い」という考え方が多くあがった。中野・臼田・中村(2010)では、自分に対する高い要求水準、達成や成功による自己評価、成功よりも失敗への注目と成功への絶え間ない追求、自己批判を完全主義の特性としてあげられている。この特性と「失敗が怖い」という主体的に動きにくい理由が一部一致していることから、主体性には完全主義が関わっているのではないかという仮説が立てられた。また、主体的に動けない場面を予備調査したところ、対人場面(上下関係場面/他者優位場面/集団場面)が多く挙げられたため、対人場面における完全主義と主体性の関連を調べることにした。なお、社会的場面でも学校場面でも主体性を求められていることから、対象者は両場面を体験中である大学生とした。以上を踏まえ、完全主義と主体性および対人場面での主体性の関連、完全主義および主体性の程度による対人場面での主体性の比較、本来の主体性および対人場面での動きにくさの程度と完全主義との関連、本来の主体性による対人場面での動きにくさに完全主義が関わっているのかについて検討することを目的とした。

方法

調査対象者) 有効回答 109 名(女子 89 名, 男子 20 名)。**調査方法)** Google フォームを用いた質問紙法。**調査内容)** ①主体性尺度。主体性に関する概念のまとめ(顧, 2020)および井上・沖・林(2006)の主体性尺度について KJ 法を参考に項目をまとめたもの, ②対人場面主体性尺度(予備調査より作成), ③完全主義尺度(桜井・大谷, 1997)。

結果と考察

本稿では、完全主義はどのような対人場面で主体的に動きにくくなるのかという分析の結果について報告する。完全主義尺度の 4 因子(完全欲求/高目標設定/失敗過敏/行動疑念)を説明変数, 対人場面主体性尺度について探索的因子分析を行

い得られた 3 因子(上下関係場面/他者優位場面/集団場面)を目的変数とし重回帰分析を行った結果, [高目標設定]が《上下関係場面》で主体性を抑制しているということが認められた($\beta = -.244$, $p < .05$)。

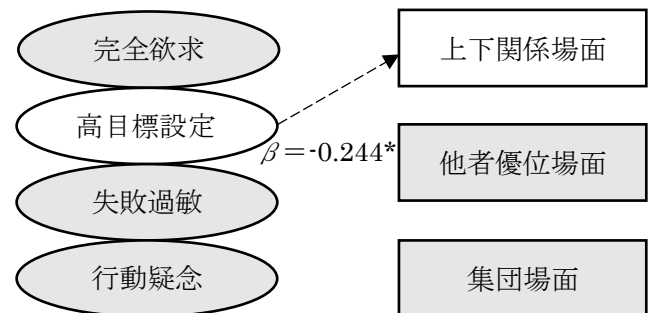


図 1. 重回帰分析の結果

《上下関係場面》には、「上司や先輩からの圧力(プレッシャー)があるとき」、「目上の人に監視されていると感じるとき」などの項目が含まれている。目上の人がいる場面としては「結果を評価される」点の特徴なのではないだろうか。また、高目標設定をする人は、実現困難な目標をたてるのにもかかわらず、それを達成することに価値を見出しているとされている(中野・臼田・中村, 2010)。上司や監視していると感じる先輩がいると、自分がどう見られているか、すなわち自分への評価がその後に影響すると考えて目標を高くもつが、その目標が高すぎる場合、達成できないのではないかといった不安が高まるのではないかと考えられる。さらに、評価への不安には「他者からの否定的な評価に対する心配、および否定的に評価されるのではないかという予測に対する心配」と定義されている「評価懸念」(Watson & Friend, 1969; 上瀧・重橋, 2016 より引用)が関係しているのではないだろうか。評価懸念には「他者からこう思われたい」「こう思われたくない」という理想自己の存在が示唆されていることから、上司からの「評価」に対しての懸念が、高すぎる目標を設定することにつながり、そのことへのプレッシャーによって主体性が抑制されるとも考えられる。